

2020
2.11
TUE

くまもとアートポリスプロジェクト 熊本地震震災ミュージアム中核拠点施設 基本設計公募型プロポーザル

開催場所 | 熊本県庁行政棟本館地下大会議室

審査員長 | 伊東 豊雄 (建築家、くまもとアートポリスコミッショナー)

審査員 | 桂 英昭 (建築家、くまもとアートポリスアドバイザー)
末廣 香織 (建築家、くまもとアートポリスアドバイザー、九州大学准教授)
曾我部 昌史 (建築家、くまもとアートポリスアドバイザー、神奈川大学教授)
池辺 伸一郎 (学芸員、阿蘇ジオパーク推進協議会事務局長、阿蘇火山博物館館長)
柿本 竜治 (熊本地震震災ミュージアムのあり方検討有識者会議座長、
熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター長、熊本大学大学院教授)
原山 明博 (熊本県知事公室政策審議監)



熊本地震の記憶を巡り、 広域的につなぐ 回廊形式フィールドミュージアム

平成 28 年 (2016 年) 熊本地震の発災から約 4 年。熊本県では、熊本地震の記憶や経験、教訓を後世に遺し、国内外に発信するために、熊本県内各地に広範囲に出現した断層等の震災遺構とともに、観光施設等をつなぐ“回廊形式”のフィールドミュージアムの整備を進めている。この「熊本地震震災ミュージアム」の中核拠点となる体験展示施設の整備をくまもとアートポリスプロジェクトとして取り組んでいる。地震の被害を遺す

旧東海大学阿蘇校舎 1 号館に隣接し、展示学習、教育、交流、総合窓口等の機能を有した施設を整備し、自然の脅威等のさまざまな情報を発信できる場づくりをテーマに、基本設計に係る公募型プロポーザルを実施した。今回、くまもとアートポリス事業の 113 番目のプロジェクトとなる。

令和 2 年 (2020 年) 2 月 11 日に熊本県庁の地下大会議室で開催した公開審査では、全国から応募のあった 41 件の中から、一次審査を通過した 5 者による最終プレゼンテーションが行われた。来場者は 300 人を超え、5 者それぞれに“記憶”、“回廊”のキーワードをもとに

震災ミュージアムのコンセプトを打ち出した。5 者の提案は伯仲し、審査員からの質疑に熱い議論が交わされた。最優秀賞に「o+h・産総設計JV」、優秀賞に「アトリエ・ワン 国際開発コンサルタンツ設計共同体」、そして佳作に「株式会社コンテンポラリーズ」、「有限会社乾久美子建築設計事務所」、「アーキスコープ・Schenk Hattori 設計共同体」を選定した。講評として伊東審査員長は、「審査会というよりもシンポジウムのような雰囲気、5 者それぞれが純粋にコンセプトを競い合う最近では稀なコンペティションになった。これは熊本ならではのことだと思う」と締めくくった。



プロポーザルの概要	
2019年10月4日	応募要項発表
2019年10月15日・16日	現地見学会
2019年12月11日	応募締切
2019年12月23日	一次審査(非公開)
2020年2月11日	二次審査(公開)

事業概要	
建設地	熊本県阿蘇郡南阿蘇村河陽地内 (東海大学阿蘇キャンパス内)
敷地面積	約 27,000 m ²
計画内容	①体験展示施設の整備 (既存建物の解体を含む) ②体験展示施設内の展示計画 ③屋外構計画 (駐車場・敷地内通路等)

最優秀賞 o+h・産総設計JV

自然の営みとともに生きる震災ミュージアムを、雄大な阿蘇のランドスケープに呼応するような大らかな屋根をもった建築で表現。阿蘇の風、光、草原など環境を取り込んだ連続したランドスケープで学びや発見につながる空間を提供する。

優秀賞 アトリエ・ワン 国際開発コンサルタンツ設計共同体

震災ミュージアムを“みんなの駅”と位置づけ、誰もが当事者意識を持てるような展示スペースなど、みんなが共有できる施設を提案。つくる会議とつかう会議を開催し、長く愛される建築をめざす。

佳作 株式会社コンテンポラリーズ

“世界をつなぐ大地の環(サークル)”をテーマに、3つの庭で構成されたサークル状のシンプルな建築とランドスケープがシームレスな一体感。学び、憩い、自然の脅威と恩恵を想う空間づくりを提案する。

佳作 有限会社乾久美子建築設計事務所

南阿蘇村に点在する震災遺構を“大地のミュージアム”と位置づけ、それを有機的につなぐ編集的デザインに取り組む。ワークショップやwebアーカイブなど資料を蓄積する拠点として位置づける。

佳作 アーキスコープ・Schenk Hattori 設計共同体

自然の脅威を感じながら、熊本地震を伝承する役割を重視。広大な時間、空間のスケールを展示コンテンツだけでなく、建築やランドスケープに落とし込み、体験によって気付きを生み出す空間に。

受賞者コメント 最優秀賞 o+h・産総設計JV

阿蘇のダイナミックな風景に呼応した“記憶の回廊”をコンセプトに、半屋外の空間を大きくし、風や光、草原といった環境に届け込む回廊的な建築を提案しました。このような賞をいただき光栄に感じるとともに、熊本地震を経験した熊本の人にとって大切な場所に、大切な建築物をつくることを重く受けとめています。